

音楽アウトリーチにおける専門人材養成プログラムの実践的開発 — コーディネーターの役割に注目して —

*Practical Development of a Professional Training in Music Outreach Activities
— Focusing on the Role of the Coordinator —*

梶田 美香 KAJITA Mika
(舞台芸術領域)

I 研究概要

1. これまでの研究と実践

本研究は、文化芸術に関する多様な分野で行われているアウトリーチにおいて、特に劇場・音楽堂等が自らの予算で企画制作して実施する音楽分野のアウトリーチ事業に焦点を絞り、アウトリーチを、「劇場・音楽堂等の舞台空間ではない場所で、一定の対象者に対して社会的意義を目的とした文化芸術活動を行うこと」と定義し、論を進める。

2000年代初頭に舞台芸術分野におけるアウトリーチが日本に導入されてから、20年以上が経過した。その間、試行錯誤の中で多様な取り組みが行われてきたが、現在抱える課題には、実施数の増加に伴って内容がステレオタイプ化されていること、しかしながらアーティストがアウトリーチの専門教育を受ける機会が不足していること、その結果、芸術的側面と社会的側面のバランスが喪失していること、アウトリーチの本来的意義が損なわれていることなどが挙げられる。

こういった背景を受け、本研究では芸術的価値を第一義とするアーティストと、社会的価値を第一義とする劇場・音楽堂等の関係を取り持つコーディネーターに着目し、両者の価値観の違いから生じる問題の改善に向け、専門人材育成の観点から実践的取り組みを行うものである。

(1) これまでの研究

これまで、多角的に行ってきたアウトリーチに関わる研究をまとめると次のようにカテゴライズできる。

① 若手アーティストに関する研究

アウトリーチに起用されることの多い若手アーティストの実態調査を行ったところ(梶田・中村、2021)、若手アーティストは、大学卒業後のキャリア構築への道筋が見つからない不安と、フリーランスでの活動からくる経済的不安が高く、この点において、アウトリーチが有効に機能していることがわかった。これは、アウトリーチによってアーティストとしての個性の自認が高まり、対象者との至近距離のアウトリーチの積み重ねが現場経

験の重要さへの認識を高め、さらには、アーティストとしての社会的責任を感じる機会になることによって、将来への不安が払拭され、活動意欲が高まることによるものであることもわかった。

しかしながら、大学卒業前にアウトリーチの専門教育を受ける機会が著しく少ないことも明らかとなり、アウトリーチの学びが現場でしか得られない状況に陥っていることがわかった。このことは、地域との繋がりを強化したい劇場・音楽堂等の職員との間に制作過程での意識の齟齬が生じていることを推測させるものでもあり、課題として認識するに至った。

② 企画制作者に関する研究

愛知県内のアウトリーチ実態調査によって（梶田、2019）、劇場・音楽堂等は当該地域での文化芸術以外の分野との連携を促進し、地域全体との繋がりを強化させたい意向を持つ場合が多いことが既に明らかとなっている。一方、アーティストとの関係においては、若手アーティストに発表の場を提供したいと考えている劇場は46.7%にとどまっていることから、若手アーティストの成長の機会となっているアウトリーチであっても、地域との繋がりへの配慮が不可欠であることは明らかである。

とはいえ、アウトリーチの事業趣旨をアーティストに伝えている劇場・音楽堂等は90.0%に及ぶにもかかわらず、アーティストの企画するプログラム内容に対して修正等の依頼をしている劇場・音楽堂等は3.3%にとどまることから、劇場・音楽堂等とアーティストの関係性の希薄さは否めないことがわかった。

③ コーディネーターに関する研究

アウトリーチ導入期は、コーディネーターとは、実施先との事務的な調整（時間、場所、費用、簡単な目的や内容の調整）を主業務とする人材と解釈されていたが、近年は、アーティストの理解や、現場の意向の理解など、質的な部分での調整が求められる人材と認識されるようになってきている。これは、アーティストの求める芸術性と実施先の求める目的との齟齬が課題となっていることを再認識させるものであり、このことを裏付けるように、先の調査では、アウトリーチを実施している劇場・音楽堂等の半数以上がコーディネーターの紹介や派遣を希望していることが明らかになっており、実施先との調整の労苦が発生していることが推測される。

コーディネーターに関する研究は少ないが、先の調査でコーディネーターの特性は次の3点であることが提示された。

- ・アーティストとの信頼関係を基盤として、アーティスト中心に制作する
- ・対象者を理解した上で、アーティストと「伝えたいこと」を共有する
- ・アーティストのキャリア構築として、アウトリーチを認識している

(2) これまでの実践

以上のような背景を受けて、アーティストのアウトリーチ専門教育を提供する機会として、2021年度に「アーティストのためのアウトリーチ講座」を実施した。講座は、アウトリーチの基礎知識を修得する座学、受講生がアウトリーチに詳しい専門家の前でプログラムを実践し、専門家から助言を受ける演習、演習で実践したプログラムをブラッシュアップし、実際に小学校へのアウトリーチを実践する実習で構成した。詳細は、拙稿をご覧ください（梶田、2022）。

2021年度に実践した同講座は、アウトリーチ実施経験の豊かな長久手市文化の家の協力を得て開催した講座であることから、コーディネーターの果たすべき役割は、長久手市文化の家の職員が担った¹⁾。

2. 本研究の概要

(1) 研究の課題と目的

本研究は、コーディネーターの存在に注目し、また、劇場・音楽堂等の職員とアーティストとの関係性の希薄さの改善を重要視し、アウトリーチ専門人材の育成はアーティストとコーディネーターの両者同時に実施すべきではないかとの着想に基づき実施する。これまで、両者を同時に育成する事例は国内でほとんど見受けられないことから、新規性且つ独自性を備えた研究であることは明らかである。

(2) 研究の方法と内容

具体的には、アーティストとコーディネーターを対象に両者が協働でプログラム制作を手掛ける講座を開催し、「新たなアウトリーチ人材養成プログラム」の実践的開発を試みるものである。

II 実践²⁾

アーティストとコーディネーターの両者を対象とした講座の開催にあたり、考えられる範囲でコーディネーターの仕事を整理した（表1）。

また、求められる知識として、劇場・音楽堂等の担保すべき公共性やその根拠となる法制度に関する事項、実施先の分野に関わる基礎知識、演奏者とプログラム案について話し合うための音楽的知識などが考えられる。その他には、実施先とアーティストの両者との良好な関係性を保つためのバランス感覚や、アーティストのキャリア形成を考慮できる思

1) 長久手市文化の家では、開館間もない頃からアウトリーチ事業を行っており、コーディネーターの役割や、アーティストとの関係性構築について、多様なノウハウを持っている（生田・梶田・細萱、2021）。

2) 本実践は、アウトリーチの実践・研究・人材育成を目的に活動する任意団体アウトリーチ・ラボの協力を得て開催した。当団体の詳細は、巻末を参照いただきたい。

表1 音楽分野のアウトリーチにおけるコーディネーター業務

カテゴリー	詳細
実施先との調整	日程調整、実施可能な場所の調整 実施先の要望や達成イメージ 対象者の特性や留意すべき対象者等についての聞き取り 他
環境の確認	実施場所の選定 演奏可能なスペースの確保 備品や必要に応じてコンセント位置や電圧等の確認 他
予算の確認	予算の確保と配分の決定 支払いのための情報の収集 場合によって支払い手続き 他
アーティスト対応	事業趣旨の説明 劇場・音楽堂等の公共性の説明 実施先に関する全ての事項の説明 アーティスト側の要望の聞き取り 制作スケジュール立案 プログラム案へのコメント これまでのアウトリーチ事例の紹介 他

考も必要である。これら中では、特に、アーティスト対応に関わる部分や、アーティストとの関係性に関する部分が、従来のコーディネーターとは異なる範囲となる。

(1) 受講生の募集（2022年8月23日～9月11日）

① アーティスト

大学生から30代までによる室内楽アンサンブルを募集し、2組の受講生を受け入れることとなった。本稿は、実施期間の関係から、そのうちの1組（声楽・トロンボーン・ピアノのアンサンブル³⁾）を取り上げて報告する。

② コーディネーター

劇場・音楽堂等で新規にアウトリーチを担当することになった担当者や、コーディネーターとして活動してみたいアーティストなどを対象に募集し、1人（X市のアウトリーチ事業担当者）を受講生として受け入れることとなった。

(2) 座学（2022年11月1日～30日）

① 実施内容

アウトリーチに関する基礎知識（日本へのアウトリーチ導入の経緯、中心的な対象分野、従来の芸術普及プログラムとの違い、関連する法律等）、アーティストに求められる信条、企画の際の留意点、コーディネーターとしてアーティストと接する際のポイントな

3) いずれも、愛知県立芸術大学大学院1年生。

どを、90分程度の講義「演奏家とコーディネーターのための人材養成講座2022」で学べるようにした。講義は動画として作成し、繰り返し視聴できるよう配慮した。また SNS（アウトリーチ・ラボの Facebook 等）を活用して座学のみを試聴希望者を募り、広く一般に教育機会を公開した。

② 講師

執筆者と生田創氏⁴⁾（長久手市文化の家館長）が中心的に務め、その他、アウトリーチ事業で企画制作やコーディネーターを務めている3名の公立文化施設職員が務めた。

(3) 演習（2023年2月4日 名古屋芸術大学アーツスクエア内リハーサル室）

① 実施手順と実施内容

表2 「演奏家とコーディネーターのための人材養成講座」における「演習」の手順

手順	実施内容	詳細
事前	企画書提出	アーティスト側が企画案を提出
手順1	ミーティング	企画書をもとに、アーティストとコーディネーターがミーティング
手順2	プレ・ランスルー	アーティストとコーディネーターのまとめた企画内容を実践し、中部圏でアウトリーチを活発に行うアーティスト等が助言
手順3	ミーティング	プレ・ランスルーの助言を改善するためのミーティングを実施
手順4	企画書等提出	新しい企画案と MC 原稿案、タイムテーブル案を提出
手順5	ランスルー	再度まとめた企画内容を実践し、全国的に活躍するアウトリーチ専門家から助言

② 講師

演習の講師を、アーティスト、コーディネーター、実施先分野の専門家、全体統括の4部門に分けて配置した。

まず、アーティスト部門には、2022年度から引き続き、田村緑氏⁵⁾を迎えた。コーディネーター部門には、座学も担当した生田氏、長久手市文化の家でコーディネーターとしての役割を担ってきた野田悠子氏と、愛知県内でアウトリーチ事業に活発な公益財団法人かすがい市民文化財団から西野裕之氏を迎えた。実施先分野部門には、2022年度から引き続き、齋藤豊⁶⁾氏を迎え、全体統括は筆者が務めた。



4) アウトリーチ・ラボ副代表。

5) 一般財団法人地域創造・公共ホール音楽活性化事業協力アーティスト。

6) 東京学芸大学附属世田谷小学校教諭。

③ 演習でのコメント

演奏面に対して、選曲や内容の根拠に明確さが欠けることが指摘され、プログラムの更なる熟慮が求められた。舞台公演と同様に、アウトリーチにも真摯に向き合う態度が求められるとの指摘も受けた。コーディネーターに対しては、アーティストに対して十分に意見を伝えていなかったのではないかと指摘を受け、実習に向けて改善が強く要求された。

(3) 実習（2023年2月22日 愛知県幸田町内の町立小学校）

① 演習からの手順

演習で改善が強く要求されたことから、受講生との面談と、改善のためのスケジュールを調整し、表3のような手順で進めた。

表3 「演奏家とコーディネーターのための人材養成講座」における「実習」までの手順

手順	実施内容	詳細
手順1	計画書提出	受講生が実習日までの計画書を提出
手順2	企画書再提出	受講生が企画案を再考し、企画書とMC原稿を再提出
手順3	練習	練習動画に対し、専門家がコメントをしてブラッシュアップ
手順4	実習	愛知県幸田町内の小学校2年生児童のクラスで実習

② 改善のプロセス

受講生と講師が一堂に会する日程の確保ができなかったため、アーティスト側の練習動画に対し、コーディネーター（受講生）と講師（筆者、生田）とアウトリーチ・ラボのスタッフがコメントをする方法を繰り返し、改善を試みた。実習を迎えるまでに6本の動画が作成され、各動画に対し5コメント程度が返された。

③ 実習概要

愛知県幸田町内の小学校2年生を対象に、45分間のアウトリーチが実施され、コーディネーター（受講生）と講師（筆者）及びアウトリーチ・ラボのスタッフは、演習から実習までのプロセスにおける変化に注力して、実習を見学した。曲目とそれに付随したトーク内容は、次の通りである。

・ ショパン作曲「子犬のワルツ」

88鍵の鍵盤を駆使した表現力を持つ楽器であるピアノの紹介

・ ナポリ民謡「フニクリフニクラ」（鬼のパンツ）

体を楽器として演奏されるテノールの魅力の紹介と発声の仕組みの説明

・ フィルモア作曲「ラッサス・トロンボーン」

動物の鳴き声を模した音を使って多様な表現力を持つトロンボーンの魅力を紹介

・ ロッシーニ作曲「猫の二重唱」

様々な異なる楽器が集まって実現するアンサンブルの魅力を紹介

最後に、プッチーニ作曲「誰も寝てはならぬ」がアンコールとして演奏された。

④ 受講生の感想

表4 「演奏家とコーディネーターのための人材養成講座」における受講生の感想

受講生	感想
コーディネーター	<ul style="list-style-type: none"> ・アーティストとの距離の取り方に悩むことが多く、会話の内容や話し方に難しさを感じていたが、演習から実習までの、アーティストの練習動画に対する講師とアウトリーチ・ラボのスタッフのコメントにヒントを感じた。相手への踏み込み方がわからない時や、踏み込んでも届かない時に、どうすべきか悩むことが多かったが大いに刺激を受けた。 ・動画へのコメントは、アウトリーチに対する視点の豊かさでもあり、多角的にアウトリーチを考えられるようになって感じている。 ・実際にアウトリーチを間近で見える機会は、事業数が限られているので、さほど多くはない。生だからこそわかることがあった。
アーティスト	<ul style="list-style-type: none"> ・限られた時間の中で子どもたちに伝えたいことを精査していくことの難しさを知った。会話は難しく、十分に返答ができなかったが、子どもたちの反応がよく、助けられた。 ・動画を撮り、それに対するコメントを受けるという往復を重ねたことで、緊張が少なく本番を実施できた。 ・子どもたちの理解が早く、反応も良く、2年生児童の能力の高さに驚いた。 ・今後の活動に大きく資する機会となった。

Ⅲ 結論と課題

(1) 結論

① コーディネーターの成長

これまでもアウトリーチでのコーディネーター経験のある受講生であったことから、アーティストへの指摘内容や、アーティストに対する理解、プログラム案へのコメントなど、いずれの面でも一定の水準であった。更なる成長として望まれる点は、よりアーティストに踏み込んだ発言による問題提起や、実施先の視点、地域にとってのメリットの視点、アーティストのキャリア構築に関する視点など、アウトリーチに含まれ得る多様な角度からのアーティストへのアプローチであり、この点においては成長の余地を感じるものである。

② アーティストとコーディネーターの関係性

アーティストに積極的に関わろうとするコーディネーターの姿勢に比して、アーティストからコーディネーターに積極的に関わろうとする姿勢は十分ではなかった。これは、アーティストにとってコーディネーターの存在が身近ではないことに起因していることが考えられる。専門人材としてコーディネーターの存在が定着していくためには、その存在意義がアーティストに理解できるような工夫が求められることがわかった。

（2）今後の課題

① 両者の成長を目的とした講座構成

両者を同時に育成する講座を実施する場合、両者が合同で取り組む機会や、その取り組み内容をさらに具体的に計画していく必要があるが、この点においては不十分であった。また、合同で取り組む内容の記録や、話し合いの際の議事録などが、制作過程で有効に機能するため、そういった習慣を義務付けるような仕組みも必要であった。育成プログラムとして機能させていくためには、互いが第一義とする価値が異なることを理解しながら尊重し、プログラム制作していくための流れを可視化する必要があると感じた。

② コーディネーターのモデルタイプの提示

コーディネーター育成の場合、具体的な業務内容や留意点を提示や実践経験の蓄積の前に、モデルタイプを実際に見学することによる学びが必要ではないと感じた。これは、演習から実習までの練習動画にコーディネーター（受講生）がコメントする回数が少なかつたものの、コーディネーター（受講生）は動画とコメントの往復を詳細に確認する中で経験の蓄積と同等の感覚を得たことから、モデルタイプの提示の有効性が感じられた。

③ チェック指標

アウトリーチの専門性は、周囲との関係性の中で発揮されるため専門性習得の度合いを自身で感じることは容易ではない。また、アウトリーチの効果は、アーティスト自身の成長、事業を主催する劇場・音楽堂等、実施先施設の三者に対して見出されるという複雑さを有しており、多角的視点が常に求められる。多角的視点の担保は、アウトリーチの社会的意義の担保と直結しており、欠かせない。そのため、今後は、アウトリーチに関わる専門人材のセルフチェックと、互いにチェックすることによる第三者チェックの二種のチェックが必要だと感じた。

以上の課題を踏まえ、育成講座を継続していきたい。

謝辞

本稿は、名古屋芸術大学特別研究費（令和4年度）の助成を受けて実施された。また、任意団体「アウトリーチ・ラボ」の多大なる協力のもとに実施することができた。さらに、2022年度に引き続き講座で講師をお引き受けくださったピアニストの田村緑氏、東京学芸大学附属世田谷小学校の齋藤豊氏には、講座開催にあたって多くのご示唆いただいた。そして、2022年度は、長久手市文化の家で長年、アウトリーチ事業に携わっている野田悠子氏、公益財団法人かすがい市民文化財団でアウトリーチ事業を担当している西野裕之氏にもお力添えをいただいた。最後の実習の機会は、幸田町民会館の金澤大介氏のご理解を得て、貴重な場を得ることができた。各方面に心から感謝申し上げる。

参考文献

生田創・梶田美香・細置亜矢「長久手市文化の家の取組み—アウトリーチ「であ—と」の現場レポート—」（2022、『音楽芸術マネジメント』14号、日本音楽芸術マネジメント学会、pp. 125-132）

梶田美香「音楽アウトリーチのためのアーティスト育成プログラムの開発—長久手市文化の家との連携による実践的アプローチ—」(2022、『名古屋芸術大学研究紀要』第44巻、名古屋芸術大学、pp. 149-162)

梶田美香・中村由加里「音楽芸術分野のアーティストにとっての公立文化施設によるアウトリーチ活動の意味—インタビューの分析による検討—」『人間文化研究』36号、2021年、pp. 135-147

梶田美香「愛知県内における文化芸術の普及啓発に関する研究—小中学校への音楽アウトリーチを例に—」(愛知県芸術劇場)

【参考資料：アウトリーチ・ラボについて】

アウトリーチ・ラボとは、2017年度末に、アウトリーチにおける地域間格差を課題に感じたアーティスト、制作者、研究者が発足した任意の中間支援組織。

(代表：梶田美香 副代表：生田創 スタッフ：倉橋祐香里、中村由加里、細萱亜矢、小田美紗季)

ミッション

アートの一滴で人が変わる。人が変わると社会が変わる。社会が変わると世界が変わる

ビジョン

1. アートとの出会いの場を創出します

私たちは地域の様々な場所にアートを届け、アートへの関心の有無に関わらず、より多くの人々がより多様なアートと出会うことができるようなプランを、学びと研究の成果として企画立案し、実践します。

2. アートを通じた様々な繋がりを創出します

私たちは、アウトリーチに関心のあるアーティスト同士、アーティストと企画制作者の間に繋がりが生まれるような場を設定します。また実践の際には、アーティストと鑑賞者、鑑賞者同士の繋がりが生まれるようデザインします。

3. 文化芸術以外の政策分野でアートを活かします

私たちは、教育、福祉、医療、経済、観光、まちづくり等、文化芸術以外の政策分野でアートを活用できるようなプランを、学びと研究の成果として企画立案し、実践します。

活動内容

1. 学び | アウトリーチについて学ぶことのできる環境・機会・材料を提供します

2. 研究 | 社会の動向を踏まえた新しい潮流を読み解くために、また、これまでの歴史から新しい知見を得られるように、研究機能を充実させます

3. 実践 | 学びと研究の結果として導き出される様々な試みを実践し、その結果を披露する機会を創出します

